

2017年9月17日 第12回ハイデガー・フォーラム 於京都大学

発表要旨

小田切 建太郎 (京都大学大学院 人間・環境学研究科)

## ハイデガーのシェリング解釈について

### ——根底と実存及び思惟以前の存在との連関における介在的な知——

振り返れば、ハイデガーがヤスパースを介して『人間的自由の本質とそれに連関する諸対象に関する哲学的考察』(1809. SW I-7, 336-416. 以下では『自由論』と略記する)を中心としたシェリング哲学と本格的な出会いを果たしたのは、『存在と時間』(1927)の公刊以前の1926年の春であった。その後、1927/28年冬学期には『自由論』に関する演習を行い、1936年の夏学期講義においてこれに関する本格的な解釈を遂行する。1941年の講義でもこれを取りあげている。このような経緯は多かれ少なかれハイデガーとシェリングの近さと証している。むろんこれについては従来様々に論じられてきたところである。本発表では、1927/28年の演習に参加したガダマーが、その際ハイデガーは人間の実存をはじめとする事実性一般における「根拠の解き明かし難い暗さ」(GGW 3, 306)を後期シェリングの「思惟以前のなもの」(GGW 2, 103)のなかに再度認識した、というこれまでほとんど顧みられてこなかった指摘を糸口にしたい。これは、ハイデガーが『自由論』に留まらず、後期シェリングにも目を向け、そこにおける消極哲学と積極哲学の区別において後者が取り扱う、人間的理性の外にある最根源的意味での事実性に対して大きな関心を向けていたことを示唆するものである。

そこですぐに予想されるのは、ハイデガーのシェリング読解において人間の知と存在の関りが大きな関心事となっていたはずだということである。言うまでもなく『自由論』の主題は人間的自由であるし、後期シェリングでラディカルに問題となるのは、理性的思惟の必然性によってアプリアリに導出することが不可能であるような偶然的な事実性であり、また消極哲学の理性的思惟の限界だったからである。こうした見立てを念頭に置いてハイデガーの『自由論』解釈を見ると、そこでのハイデガーの中心的な関心が、従来根底と実存の区別や無底といった問題事象の陰に隠れた——むろんそれらの重要性はまったく否定しない——、後期思想における現-存在(Da-sein)の問題を背景にした、人間の知の役割に向けられていることがわかる。そこで問われるのは、如何なる意味における人間の知的役割がそこで求められていたのか、ということである。これがここでの問いである。そしてそれは非主体的ないし非主観的な人間理解、つまり介在的であるという意味で非主体的な人間の知的役割が問題であったというのがここで主張である。

よって本発表の目的は、後期ハイデガーにおける人間の知の介在的な働きの意味に関して、根底と実存、思惟以前の存在といった問題事象との連関において解明することにある。

初期思想の現存在自身のために (Umwillen) が構成的な超越と地平によって特徴づけられるある種の間人中心主義とは別の仕方における人間の役割を、ハイデガーによるシェリングの『自由論』の解釈及び両者における思惟以前の存在の意味に関する比較考察を通して示すことである。それゆえ、思惟以前の存在に関して、従来の研究では従来 (最) 初期ハイデガーと思惟以前の存在の (影響) 関係が取り上げられてきたが、本発表ではむしろ後期ハイデガーとの関係を問題にしたい。その理由は、従来考えられてきた思惟以前の存在の (最) 初期ハイデガーへの影響が近年疑問視されている点、そして後期ハイデガーのテキストにもその語が登場する思惟以前の存在の問題が彼の思想 (形成) において重要な意味を持つと考えられるにも関わらず従来これが等閑視されてきた点にも求めることができる。

解明は、具体的には以下の手順を取る。まず、1936年夏学期講義における『自由論』解釈を参照しつつ、『自由論』における根底と実存の区別における神の生成、創造作用と、そこにおける人間の知の介在性に関して、「知的愛 amor Dei intellectualis」(スピノザ) に象徴される新プラトン主義的背景やこれについての研究を参照しつつ明らかにする (1節)。つぎに、準備的考察として、後期シェリングのテキスト「積極哲学の諸原理の別の演繹」を取りあげて、理性的思惟と思惟以前の存在の関係に関して明らかにしておく (2節)。そしてこれを受けて、後に自己批判の対象となるハイデガーの形而上学構想における現存在の超越の基本的理解を1928年夏学期講義に確認し、そこにハイデガーと思惟以前の存在の事象的な結びつきを見る先行研究 (M.ガブリエル) の解釈に批判的検討を加える (3節)。最後に、後期の対話篇「アンキバシエー [接近]」(1944/45) を参照しながら、形而上学的な表象的思惟への (自己) 批判の所在を明確化しつつ、ハイデガーの後期思想の存在そのものと思惟以前の存在の結びつき、そして存在の (非) 覆蔵性の自己覆蔵性、存在史における存在の自己贈与、存在のゲシックの自己変貌における人間の知、人間の言葉の介在的な役割について明らかにしていきたい (4節)。